



# 第十二回町民展のご案内

## ふるってご応募ください

公民館の文化行事で恒例の第十二回町民展を次の要項により開催いたします。広く町民の皆様よりの作品出品をお待ちしております。

主催 小須戸町文化協会・小須戸町中央公民館  
会場 小須戸町中央公民館三階  
会期 十一月一日(土)より三日(月・祝)までの三日間  
応募資格 小須戸町内在住又は勤務する者(ただし高校生以上)  
作品 出品作品一人二点以内、大ききについては制限しない  
出品料 無料  
出品種目 日本画・洋画・書道・写真・工芸・彫塑  
※出品作品はすべて無審査のうえ展示します。  
出品申し込み 十月二十五日(土)午後五時までに中央公民館事務局まで。



# 催しものご案内

## フクロウハイキング

秋の夜を歩こう

日時 九月二十四日(水)午後七時三十分  
会場 中央公民館二階会議室  
コース 中央公民館→水田→鎌倉→金山→竜玄→下→こぎ→中央公民館前(到着・解散)  
持ち物 雨具・セーター・懐中電灯・その他必要なもの  
申し込み 中央公民館へ電話でお申し込み下さい(二八八二三四)  
その他 ○全行程十五KM ○到着は午後十一時の子定 ○雨

# 定期映画会のご案内

夜が涼しくなってきました。散歩のついでに親子でどうぞ。

日時 九月二十六日(金)午後七時三十分より九時  
会場 中央公民館二階会議室  
上映映画 ナイチンゲール物語  
・時計のない村・動物村の消防士・とうきちとむじな 外一本  
連合婦人会九月の集い  
テーマ 婦人の健康  
「いつまでも若く美しく」と題して次により婦人の集いを開催いたします。役場の保健婦さんをお招きくださいます。

# 会員募集

## 民謡から一つの和をつくりませんか

全国的に昔から優れた、たくさんの方々が伝承されておられる民謡の喜びや悲しみを秘めて歌い継がれてきました。これらの民謡はいわば私たちの心のふるさとであり祖先が残してくれた文化遺産であります。民謡に参加することから一つの和をつくりませんか、お待ちいたしております。

# 矢代田分館

## 分館運動会開催

期日 九月二十八日(日)  
時間 午前八時三十分開会式  
会場 矢代田小学校グラウンド  
(雨天の場合は同校体育館)  
皆様お誘い合せのうえ、多数ご参加くださいますようお願いしております。

# 横水分館

## 分館野球大会

分館恒例の野球大会が去る八月二十四日(日)に行われ、熱戦の末文京町チームに米田杯が授与されました。成績は次のとおりです。

# 小須戸分館

## 第一回ゲート通過記録チャンピオン大会のご案内

期日 九月二十一日(日)  
時間 午前九時三十分より  
会場 大川前河川敷ゲートホール専用コート(現地集合)  
参加者 老若男女不問、どなたでもお気軽にご参加ください。

# 分館だより

午前中は中央町連合チームがトップの成績でしたが、午後から竜玄チームが実力を発揮して、結局三年連続の竜玄チームの優勝を閉じました。結果は次のとおりです。



# 横水分館野球米田杯について

明治十二年四月創立、昭和三十三年三月、三校統合により、七十五年の歴史に幕を閉じた横水分館。この限られた歳月に育まれた生徒総数二千五百余名、少数ではあったが、町内外に又果外に進出されて、政界や財界に功成り名を遂げた多くの人材を生んでいる。

# 走り高跳びで荒井全国三位

八月二十三日、東京駒沢陸上競技場において、小須戸中学校荒井亮子さんは去る七月の全日本中学校通信陸上競技大会記録1.62が全国で第三位に入賞し表彰状の伝達式がありました。

# 新保分館

## 分館運動会

猛暑の去る八月十七日(日)新保地域研修センター広場において分館運動会が行われました。

# 川柳教室作品

青い実がいつきに熟れて夏終る  
穂を垂れてすまないように低米価  
豊年のおみくじが出て神迷い  
同級会実らなかつた女の酌  
うだる夏みのりの秋て活気つき  
播くも義理されど実りて友思  
白球に掛けた青春実を結び  
遅れ来た猛暑に捻りの期待かけ  
二年越しやと実ってハネムーン  
実った雀と案山子が話し合う  
実る秋うぶ声聞えて母多忙  
担当に入れた畑も良く多り  
何回もデート重ねてゴールイン  
細腕が立てた実りの金字塔

# 中学生文芸

朝起きて今日で終わりの夏の海  
夏の海激しく波を押し上げる  
秋の雨乾いた砂にしみわたる  
夏惜しむ鴉の足跡波に消え  
子供供が貝がら拾う夏の果て  
夏惜しむ女子のスカート濡れそぼつ  
秋の海鷗追いかけてびびきやびと  
秋の海波打つ音が大ききと  
夏の海今年最後と訪れる  
岩かげに小さく咲ける夏の花  
秋隣り海も知りしか薄茶色  
浜辺にて波とたわむれ夏終わる  
秋近し色変わりつつ山の本々  
浜茶屋の出入り少なくなき海  
背に受けし夕日さみしく夏終わる  
荒波を背に受け遊ぶ子供たち  
秋風に押されて過ぎゆく夏の日々

# 八月例会作品

桃の実の太って来たたり類染めて  
浜なすや宿の薄下駄裏参道  
わくら葉を舗道に散らし夏柳  
白南風に草湧き馬頭観世音  
香を放つる草の上敷梅雨明けり  
冷奴一人が二合のきまり酒  
夜ざらしも三日目となる梅の朧  
田に出ては戻りくる蝶夏の菊  
夏草のまだらに伸びて分譲地  
庭下駄のゆるき鼻緒や苔の花  
酒の栓九き音して梅雨明けぬ  
ペン筒に幾年同じ団扇差す  
遠花火音なく聞かぬの光る  
大西日水かけ不動の銭光に  
梅干の陽の匂ひまで漬け込みぬ  
言いかけて言葉つまずく青胡桃

# 短歌

高原の真昼ひそけし青紫蘇の葉に染まりゆく  
敵の枯草  
わが父母の衰えたれば行楽もなくて幾とせ妻  
と夜を過ぐ  
川へだて一段高き送電塔の赤き灯りが星空に  
見ゆ